

鉄鋼ニュース

鉄鋼 32 年の生産量

鉄鋼連盟の調査によると、32年の鉄鋼の年間生産量(12月分推定)はいずれも前年の最高記録を大きく更新するものと見られている。すなわち高炉鉄は6,433,863t(前年5,703,910t)で112.8%、粗鋼は12,531,173t(11,106,386t)で112.8%、一般鋼材は8,875,306t(7,992,676t)で111.0%となるが、特殊鋼熱間圧延鋼材もまた621,824t(前年比125.5%)で、戦前最高636,867t(昭和19年)に迫る実績を示すことになるものとみられる。

日本ウジ・ミナス社の発足

ブラジルのミナス製鉄所への投資を目的とする日本ウジ・ミナス会社は、12月25日日本工業倶楽部で創立総会を開き会長に豊田貞次郎氏(元日銀社長)、社長に進来要氏(太平工業社長)を運んだ。この会社はブラジル・ミナス製鉄会社に対しての投資、設備機械類の供給、建設および運営についての協力などを目的として設立されたもので、鉄鋼、機械の大手メーカー14社が共同出資、払込資本金7億円(授權資本28億円)である。なお現地派遣の技術担当重役は白石芳雄氏(八幡製鉄所製鉄部長)と決定した。

インド鉄鉱山開発調査団の出発

神戸製鋼社長浅田長平氏を団長とするインド鉄鉱山開発調査団一行27名は、昨年12月末までにそれぞれ現地に向つたが、本隊は鉱山第一班、第二班、鉄道第一班、第二班、港湾班に分れてそれぞれ調査の任に当ることとなつている。

インドの鉄鉱石推定埋蔵量は現在210億tといわれ、米国の220億tに次いで世界で有数の高品位の鉄鉱山を有している。また同国の鉄脈は東部インドを東北から西南に走つており、とくにビハール、オリッサ州にまたがるルールケラー地区は80億tの埋蔵が見込まれているほか、マデイヤプラデシ州のパラデラ地区(70億t)、マイソール州ベラリー・ホスパット地区(25億t)などに集中し、品位も65%程度をもつている。

一方わが国の鉄鉱需要は年々増加しており、昭和37年には1600万tを超えるものとみられているが、従来の輸入先であるフィリピン、マラヤは鉱量が少なくなつているため開発にも相当経費がかさんできており、一方中国からの輸入は政治的な意味合いから困難であるため、いきおいインドに対する依存量は大きくなつている。

このような事情から、将来年間600万t(現在170万t)

の輸入をインドに求めることにならう。しかし同国の鉱山開発を本格的に行うためには、鉄道、港湾の設備と道路建設が先決となつているので、日本側の希望する鉱石量が輸入されるまでにはなお数年かかるとみられる。

鋼管川崎の中径管工場操業開始

日本鋼管川崎製鉄所の池上地区に、かねて最新鋭設備と性能を誇る中径管工場の建設を進めていたが、このほど圧延設備を主体とする第一期工事が完了、12月5日から操業を開始した。これは転炉の純酸素設備とともに同社、第二次合理化計画の主要な一環として総工費56億円で31年3月から建設工事を進めていたものである。

新工場は帯鋼、鍛管工場に隣接し、総敷地1,500坪に3棟続きで長さ470m、巾132mの鉄骨スレート建の広大な工場で、各種圧延機械はこの広い工場内にむだなく配置され、スイッチ1つで全工程が自動的に操作されるという完全オートメーション化され、能率設備の両面で世界の最高水準を行く中径管製造工場と云われている。

室蘭製鉄所の焼結機増設

富士製鉄室蘭製鉄所が、総工費7億8千5百万円を投じて31年12月に着工した同所焼結工場のドワイロイド方式マツキー型焼結機一連の増設工事はさき程完工、12月から操業に入つた。

こんど完成された新焼結機一連の設備は、いままでのものと同じドワイロイド方式の焼結機であるが、米国のマツキー社のタイプで、電気設備には初めての直流方式が採用され、原料から製品までの全工程に一貫した総括制御がなされる完全オートメ化された最新鋭の設備で、生産能力は月産3万t、また製品の冷却も従来の水冷式から空冷式に改善され、コットレル(電気収塵機)のファン3基と防塵カバーなどで焼結粉が完全に収塵されることも結焼工場としては画期的なものである。

東北金属の大型真空熔解炉

東北金属工業では、高級磁性材料、高級特殊鋼等の需要増大から、最新大型真空熔解炉を米国ナショナル・リサーチ社から輸入、据付を急いでいたが工事は順調に進み、12月中に操業できる見込となつた。

この真空熔解炉に溶解量1000ポンド(500kg)のもので、すでに同社で操業している同型式100ポンド(50kg)の良好な成績をみて計画され、わが国はじめての大容量真空熔解炉となるものである。